ターニングポイント―時代と教育の課題―

山下　宏

はじめに

ターニングポイント、つまり転換点または節目、そういう意味合いですけれども、広い意味でも狭い意味でもいまちょうど転換点にさしかかっている時期かと思います。時代はまもなく二十世紀を終わり、二十一世紀へ入る。これもひとつのターニングポイントになろうかと思いますし、もっと実質的にはいまの世界や日本、これも大きく変わって新しい時代に入ろうとしております。同時に私自身としましても、きょうはその会ですけれども、長年勤めてまいりました仕事から退いて、自由な新しい生活に入ろうとしている、こういう意味でも個人的なターニングポイントとなっております。そのあたりのことをお話してみたいと思っています。

「概要」の流れに沿ってお話をするわけですが、これは、実は一昨日でしたか、せめて簡単なメモぐらいはと思いつき、はじめたところ、いっそのこと皆さんにこのメモをお渡ししようかということになった次第です。ご参照願えればと思います。

大きくふたつの内容になっています。ひとつは私が受けとめているいまの時代の動きまたはその特徴といったこと。もうひとつは、その中に含まれる教育の動きというものを考えてみたいと思います。重点は後半にあります。

一　時代の状況に向かい合って

まず第一は、話の前半にあたりますが、時代状況の問題です。特に経済面が分かりやすいかと思います。最近、この十年くらいになりますか、不景気ということがさかんに言われて、確かに、実質そうなんですけれども、その言葉が耳にタコができるほど聞こえてまいります。不景気というのは、そもそもいつごろから始まったのかといいますと、皆さんもご承知のとおり、平成二年のバブル崩壊からです。バブルというのは泡沫、あぶくといった意味で、そのような経済事情だというわけです。あぶくは遠からず消滅する、はじける運命にある。そういった経済が健全であるはずがなかった。必然的な結果としての崩壊と

いうことになるでしょう。

実はそのバブルの現象というのは、昭和六十年ごろから始まったと言われています。五、六年の間バブル現象が続いていて、崩壊したのが平成二年ということです。高度経済成長というのは、世界的にみて、特に日本の大きな特徴といいますか、実績でして、そのスタートというのははるか私が中学校を終えたころということです。昭和二十五年に朝鮮戦争が起こった。これは他山の石、日本には直接関係ないと思われるかもしれませんが、とんでもない。すぐお隣の国の戦争で、日本は米軍の基地となりました。昭和二十六年に出京した私は、朝鮮戦争で破壊した戦車その他の大型武器が、処理か修理のためだったのでしょうか、多数のレッカー車に乗せられて東京の市街を列をなしてひた走る光景をたくさん目撃したものです。その朝鮮戦争は日本の経済に大きなプラス影響を与えたというのは本当のことだったようです。そうして、日本の経済成長はそのころから徐々にスタートしたといわれております。昭和三十年の保守合同によって経済立国が宣言され、絶対に野党に政権は渡さないという決意がなされたわけです。五十五年体制というものが三十数年を通じて保たれ、高度成長を達成しましたが、いまからほぼ十年前についに停止した。私が長野に来たのは昭和四十七年で第一次オイルショックの直前でしたが、たいへん景気がよく、ベースアップの上昇率が高かったから、その時のサラリーマンはいい気分にひたっていた。たしかにその中にいれば、みんなありがたいと思っているけれども、本当によかったのかどうか、それから十数年たったいま振り返ってみますと、それはこういった今の状況を生み出すプロセスの一環であって、必ずしもいいことだったとは思えないところがあります。

「不景気」という低成長またはマイナス成長の時代を迎えて、誰もが困った困った、大変だ大変だと言っております。予算委員会など国会の議論を聞いておりますと、年中、景気浮揚と消費拡大ですね。私は不思議に思っております。経済というのは確かに人間にとって大事ですけれども、それは程度の問題なんですね。無制限な拡大、桁はずれの拡大というものが、必ずひずみを生むということは、多分わかっているはずですけれども、それが止められないというところが、私には不思議でなりません。経済がなおさら成長することが、いまの最大の課題なんですね。成長しなければならぬ、成長してもらいたいと誰もが思っています。しかし、もっと別に成長の必要なものがあるはずです。教育関係者だからそういうふうに思うのかもしれません。教育というのは、子どもの成長をいちばんの眼目にしますね。

「君たち、将来は大金持ちになりなさいよ。儲けなさいよ。何をしてもいいから、儲けなさいよ」などとは教えません。「お金持ちというのは立派なんですよ。お金があれば人間は仕合せですよ」などとは教えませんね。もっと別なこと、いま流に言

えば共生といいますか、人々と仲よくして、人の気持をわかり合って、困った人がいれば助ける、辛いことがあれば一緒に考える、そういう人間のつながりを大事にする。生活を切り詰めて、あまり贅沢はしない。余分なものがあれば、困った人は世界にいっぱいいるわけだから、ユニセフその他の制度を生かして、そういう人たちに分けてあげる。こういうことを教育では教えると思います。心の成長、人間的な成長、倫理観、道徳観の成長というようなことは国会ではほとんど論議になりません。もっぱら、物と金の豊かさを追求する論議のみをやっている。

これからの日本の経済成長はおそらく低成長で推移するだろうと予測されていて、それが私はまともだと思います。その予想が当たることを期待しております。経済成長がなぜ必要なのか。物価が上がる、だから来年は経済成長、所得がふえなければ何も成長はできないということになるのかもしれません。しかし、最近は一部デフレ傾向にあるといわれ、実際にそういう現象が各所に起こっている。つまり物価が下がるということですね。将来デフレ傾向にあるとすれば、所得は上がらなくなるし、それでいいということになります。二十一世紀は物価をおさえ、生産調整についてもいろいろ工夫をしてやっていけば、収入、所得がふえなくても、生活はできるわけです。ギリギリの生活。ただ、生活を一定水準に保ち、落ちついたノーマルな水準で推移するなら、それはとても結構なことです。贅沢にはきりがありませんし、人間の欲望には果てがないのですから、金と物がたくさんあれば仕合せのような感じがしちゃうわけです。そうするとやがて遠からず破綻がやってくるということになりますから、その前段階でもっと理性とか抑制とかを働かせて、人間らしい生活をするということになりますと、経済面ではなく、もっと違う面が大事になってくるということになります。二十一世紀はそういう意味で、成長はあっても緩やか、または成長しないかもしれないという予測のもとに、私はまことにいい時代になるだろうと思うわけです。もっと簡素で、質実剛健な節約型の生活といったものの大いなる楽しさ、逆に真の豊かさというものもそれに応じて生まれてくるということを私どもは信じなければならない。信じるだけじゃなしに、実行しなければならないと思います。

昨年の暮れの日銀の調査によりますと、市中に出回ったまま年を越す持ち金、いわゆる日銀券の額は約五十六兆円ということです。この額は過去最高だそうです。不景気のどん底といいながら、金はあり余っているんですね。それだけではなくて、日本の経済力というものは、世界に類を見ないくらい強いものでして、外貨、海外に蓄えているまたは所有している資金、資産というものも膨大なものがあり、日本は決して貧乏だとか、金に困っているとかいうことはありません。不景気とはいっても、金はたんまり抱え込まれている。そのように、経済成長、

物質的な豊かさというものを追い求め、大量生産、大量消費型の生活を日本はしてきたのです。世界的にも大なり小なりそういう傾向があって、人類はやっぱり共通するなと思わされます。日本は昭和四十年代でしたか、外国からいろいろ言われたことがあるんですね。忘れもしない、自分たち自身に対する不快感を抱いたものです。それは高度経済成長のまっさかりのこと、特に東南アジアの人たち、わりと貧困な生活に耐えていた人たちからの非難でした。皆さんも多分ご存じのキーワード、「エコノミック・アニマル」です。「エコノミック・アニマル」、これは何と嫌な言葉でしょうか。侮辱感に満ちています。日本人は経済動物である、金持ちだけの動物的な人間であると。人間性を失った怪物と見られたわけです。ちょうどそのころ、ささやかですがこんなことがありました。県内でも有力な先輩格の先生と対話をしていて、墓の話題に及びました。私も狭い墓地を入手したばかりで、さてどんな小柄で品のある墓標にしたものだろうかと考えていたのですが、その先生は「わが家でも最近墓を立て直したが、北欧産の一番丈の高い、値の張る墓石を仕入れましたよ。」と得意げにおっしゃる。それを聞いた瞬間、私は一種の嫌悪めいたものを感じ、その先生に対する信用も白紙と化してしまう思いでした。いまも忘れないことのひとつです。

HOWからWHATということが最近話題になってます。HOW、いかに物をたくさん作り出すかが産業方式となった。そして一方で消費をあおりますので、どんどん買い込み、使い捨てして、それが地球とか自然環境とかに大きな悪影響を与えてきていることは誰もが知っていることです。環境保全ということが、いま大きなテーマになってきています。エネルギー、これは限界があるものです。ただ新しく太陽熱などを利用するというのが、これからの課題のようですけれども、地下資源は蓄えが少なくなりますので、それも限界がある。エネルギーというものは、物理的、分量的に限界が近づきつつあるということです。エネルギーを消費すれば、それが環境に悪影響を与えるということになります。食糧も将来危機が見通されているということです。こういった生活の基本的なエネルギー、食糧や住まい、すべての生活の環境が思わしくない状況になってきますと、人類は非常に危険なことになるわけです。切り詰め型の生活にしなければならない、ライフスタイルを変えていかなければならないとかなりの人が主張していますが、私もそのように考えます。

最近NHKのラジオ番組で聞いたある経済学者の話によると、これまでの経済学には拡大とか増加とか膨張とか発展とかという意味での豊かさを追求するという考えがある。その考え方のみで、日本を含めた世界の経済学が成り立っているけれども、その逆の経済学はいままでなかった。抑制・制御とか、または

停止とか。停止というのは、なかなかありえないかもしれませんが、抑制、制御という方向はありうるし、なければならない。だから、これからの二十一世紀の経済学では、これが一つの課題になる。「なるほど、なるほど」と、そのとき私はひとりでうなずいてみたわけですけれども、もし、輪廻転生ということがあれば、生まれ変わって、今度は経済学を勉強してみたい、制御・調整を志向するこの経済学を打ち立ててみたい、そんなことをまじめに考えました。

欲望を丸出しにした二十世紀といわれています。このごろNHKのテレビ番組でもやっていましたが、いまの時代は、欲望によって地球を破壊すると同時に自分というものをも失ってきているという。地球および人間ひとりひとりが、いま、みんな悩み、泣いている、そういう現象がある。また、これはあるコンサルタントの発言です。画一的多量の時代から、多様的実質の時代へ動こうとしている、変わろうとしている時代だといいます。いままでは物をたくさん作らなければならなかった。戦後の無一物状況では、まず物を作らなければどうしようもなかった。みんな、物を求めていた。で、物を作って、売れば金が儲かります。そこに経済がつきまとってきます。物と金というのは、ここでセットになります。無一物から物が生まれてくると金がふえるということになります。その拡大・増加によって、高度成長が促されたわけですけれども、戦後のあの廃墟の状況からいえば、確かに画一的なものでも、とにかくたくさんの物が必要だった。しかし、それが延々と五十余年間これというチェックもなしに続いてきてしまったというところに問題がある。どんどん使い捨てを繰り返す。同時にそのための、多くの物をいかに作り出すかという技術とその錬磨。それに対して、最近は、いいもの、様々な求め方をする人が刻々ふえてきている。価値の多様化などともいわれるわけですけれども、それぞれの好みというものが表面化し、そういったものの必要性から多様化現象があらわれてきた。いわゆる多様的実質。そこではHOWではなく、WHAT。誰に対して何を作るのかということで、いまや生産方式の転換にせまられている。

もうひとつ、昨年（平成十年）十二月二十二日の朝日新聞「天声人語」に同類の主張が書かれていて関心をひかれました。「『消費拡大』の大合唱」、これが最初の言葉です。続いて、「買うことは繁栄の道」、「浪費をつくり出す人々」、「持ち物の約五分の二は、どうでもいいものかぜいたく品」、「メーカーはもっと売るためにいろいろな手を使う」「一種類の品物を複数買わせる戦略」、「一方で、何百万の家族が食物と衣服と住宅に不自由している」、そして最後に、「生産を続けるために消費を人工的に刺激しなければならないような社会は、屑やむだの上につくられた砂上の楼閣である」と結んでいます。

中国の古典たとえば『老子』の中に、誰もがご存じの「知足」

という言葉があります。「知足の足、常足」ともいっております。これは、物の多少には全くこだわらないという徹底した考え方です。いま、私どもはこの「知足」の心に学ばなければなりません。そうすれば、二十一世紀も安心して迎えられるでしょう。

二　教育界の動向とその課題

1　能力主義から人間主義へ

さて、後半に進みます。教育界の動向について思うところを若干申しあげたいと思います。日本の、それも戦後に限定しますが、日本の戦後の教育は、だいたい能力主義からスタートしました。

昭和二十二年、戦後初の学習指導要領が、ついで二十六年にその改訂版が出ました。これらはいずれも試案です。しかも文部省「発行」という形をとっています。現在のような「告示」という形ではありません。いわば参考書のようなものです。内容も、生活単元の構成による活動を主軸としたものでした。能力という言葉もまだ表面化しておりませんでした。ところが昭和三十三年の二回目の改訂、ここから、能力主義が入ってくるわけですね。科学学問を背景とした能力主義的な教育の在り方が確定します。「告示」という形もここからスタートします。告示というのは一見そんなに厳しいものではありませんが、実質的には徐々に強制的拘束力をおびるものになっていって、学習指導要領に従わない教育をして、裁判を通して処分された事件が何件もありましたね。いずれにしても、戦後の教育は、能力主義に基づいて系統的に行われてきました。もちろん系統学習の構想が順調に展開すればよいのですが、それがうまくいかない場合はおのずとそれに見合った結果が出てきます。優秀者と劣等者が段階的に位置づけられ、評価されるという傾向が顕著に出てきます。

昭和三十五年頃から、日本では激しい入試競争が始まったと言われています。つまり、三十三年の学習指導要領による新教育と軌を一にして現出したものです。大学でも昭和五十四年に共通一次入試がスタートし、現在は入試センター試験という形で継続しています。入試の方法についてはさまざまな苦心と工夫が試みられましたが、受験戦争を鎮静化することはやはりできなかった。その大きな要因は、教育に対して社会構造が背後から覆いかぶさっているところにあるようです。平成元年の学習指導要領の改訂、これもバブル時代の終息へ向けてと潜航する世の流れに沿って現れたものということができます。そのように、教育は必ず時代の後について行くわけです。経済社会の動きがいつも先行します。必ず時代や社会の後についていくことには、何か、教育にとってのいいしれぬ切なさ、つらさがあ

る。もっと社会や時代をリードする力、社会や時代を作り出していくような力がないのか。それは、私ども自身の能力不足なのか、あるいは能力を超えた問題なのか。いずれにしても、それができない現状がとても残念です。ひとつ冒険心を抱いて、二十一世紀には教育が時代の先頭役に立つ、リーダーシップを発揮することはできないか、そういうことを考えて、これから、少々申しあげたいと思います。

2　学習者たちをとりかこむ環境への対応

平成に入って唱えられた人間主義というもの、それはその時、やむにやまれず打ち出さざるえなかったのです。時代の流れに応じて、知識・技能だけでは、どうしても時代のニーズに合わないという判断からです。判断内容を表すキーワードが「人間主義」になっているわけです。そして子どもたちの活動、実践、自主性を改めて重要視し、「生活科」という楽しい授業も作りました。ところがそれも焼け石に水、あまり効力を発揮していないようですね。どうやら時代には勝てない。その証拠として、学習拒否は以前からありましたが、最近は学級崩壊という深刻な事態が頻発しはじめた。大学院の授業で学級崩壊のことをテーマにして話し合ったことがあるんです。現職派遣の院生が数人いて、彼らの発言は有益なものが多いんですけれども、学級崩壊はこのようなものなんだという実際状況を話してくれるわけです。皆さん方も教育関係者ですので、学級崩壊がどんなものかはどれほどか経験もされているでしょうし、または聞き取られて想像もできることでしょう。長野市でも幾つかの小学校にあると聞いております。他人ごとではありません。これは実に難しい問題です。この間私は、県の学会の会報に「学級崩壊はなぜ起こるか」という一文を書きました。もう印刷中かと思いますが、まだ発行されておりません。

いろいろな問題はあるけれども、私のひとつの判断としては、やはり時代の流れに教育がうまくかみ合っていない。それが学級崩壊の中核的、根本的な原因じゃないかと思っております。どんな時代の流れの中にあっても、子どもたちは生かされておりまして、生活を通して子どもたちは一切合切を受けとめ、また成長していくわけですね。それと教育の出会いにおいて、教える中身、教え方が一致しないということになりますと、子どもたちに合わないことになってしまいます。

はっきり言って、教育は正しいんです。社会の方がむしろ間違っているんです。私はそう信じております。今日の社会には、高度経済成長のゆがみ、ひずみというものがいっぱい残っていて、それが人間の判断力、行動力というものを規制しております。教育は百年一日のように、真面目一点張りでやっています。皆さん方、教科書を開いて検討してみてください。そこにまと

められている教育の内容、これほど真面目なものはないでしょう。そうして、同時に人間にとって大事なものです。そういう内容が網羅されております。教科書には選び抜かれた内容、題材がみごとに集約されております。大勢の専門家、実践家が集まって練りに練って教科書というものを作りだしております。人間に不可欠なものです。特に人間らしい生活を送るために、技術、知識、技能とその内容ですね、価値ですね、それが合わさったものとして、教科書の内容はかなり精練しつくしたものであると思う。それを子どもたちに教えつつ教師自らも学ぼうとしている教育というものは、絶対に間違ったものではありません。この点について、私どもはもっと自信を持つべきです。

ところが、社会全体があっちこっち相当ゆがんできてしまった。終末現象といいますか、とにかく社会は乱れ、濁りに濁っております。政治家から役人が、もう毎日のように汚職ばかりしているじゃありませんか。そういうモデルになるべき人、模範を示さなければならない人たちがいい加減なことをやっています。そういう情報が、いっぱい子どもたちにも届いております。真面目にものを判断できないのは当然です。そういう社会・地域・家庭から学校に行きますと、百年一日のように、同じ内容で真面目にやっているでしょう。ですから、なかなか合いませんね。しかし、ともかく教育は正しい。いい社会、いい人間をつくるために正しいことをやっている。むしろ、社会がかき回して、子供たちを変につくり上げて、それを学校にはめ込むものだから合わないことになる。

ところで、教師が自信を持ちすぎても困るんですね。自信は持ってもいいけれども、満足をしない方がいい。やっぱり教育は社会との連携の上に成り立つものですので、私どもは何をすべきか、もう一度教育の内容や方法を点検してみる必要がある。社会とのズレがどういうところでどのくらい生まれてきているのかということをさらに点検する必要がある。その上でしかるべき調整を図っていかなければならない。そこを今やろうとしているところだと思います。調整は毎日やっているわけです。どうして子どもはこうなったのか、なっているのか。この子どもに合う教育内容・方法をどうやってつくり出すかということは、みんな真剣に考えておりますね。そこはやっぱり自覚的、意図的にやるべきだと思います。そうして、満足しちゃいけないというのはどういうことかと言いますと、さっき私は、社会は悪い、学校は正しいと、こう二分しましたね。これは極論ですからどうか誤解のないように。二分したところで、まあ社会を敵に回すわけです、学校は。自分たちは正しく社会は間違っていると思えば、ある意味では敵対関係です。しかし、それで終わってはいけない。社会に呼びかけ、共に考えて、間違っているならば直していくということを学校は率先してやらなければいけないだろうと思います。その点が重要で、子どもだけを

相手にしても駄目なんです。最近は、学校・地域・家庭、これが連携を密にしなければならないということが最大のテーマになってきている。当然のなりゆきといえるでしょう。

いま言いたかったことは、どこか学校というものは自信を喪失したり、業務が大変だからやけになったりする恐れがあるというように私は考えておりますが、割り切ってみれば学校はやはり正しいということなんです。同時に、正しいのは正しいんだけど、その上でいろいろ方策を考えましょう。みんなで集団的な討議を経て、学校の役割を果していきましょう。学校はしっかりと社会とタイアップすべき存在で、押し流されてもがきっぱなしではいけない。このことを主張したいのです。

次に、競争の時代、これはざっと数十年も続きました。競争は、教育に社会体制が複合したところから生まれたものだといえます。そこに積もり重なった心のひずみ、悩みというものは大きい。じゃあ、どうしたらいいのか。これを匡正しなければなりません。あるいは尊大めいて聞こえるでしょうが、私ども教師は匡正の使命を負っております。競争というものは古くから狂騒でもあったんではないかと思われます。それが、今度は共創です。争う競争ではなくて、共に力を合わせて創り出そうというわけです。以前の競争は、社会体制という強制力によってどうやら道を選ばされ、狭い道に閉じ込められて、それで騒がしくなってきたんだと思います。で、共に創り出す共創の時代にいまや到来している。そこに共生がある。

石川光男さん、これは国際キリスト教大学の教授で生物物理学を専攻している方ですけれども、『自然に学ぶ共創思考』というおもしろい本を出しておられます。そのことを知った情報源はラジオで、朝の四時から五時までの間「心の時代」という番組があります。それを聞いていて、たいへんおもしろい話をしているなあと思ったわけです。物事には自然にも人間にも開放性と閉鎖性があって、その閉鎖性はまずい、開放性を持っていかなきゃいけないという話です。自然も人間も同じシステムを本来は持っているんですが、人間の方の生命のシステムは怪しくなってきている。科学万能主義で人間は人工的にいろいろやっちゃったもんですから、おかしくなってきている、狂い出してきている、そういう話をしていたんですね。話の主について知りたくて、その日の昼、ＮＨＫへ電話をして確かめ、石川光男さんの著書三冊を紹介してもらいました。その一冊がこの本で、まさにこのテーマでその時お話なさったのです。教育問題にも言及しておりますので、皆さんにもお勧めしたいと思います。自然を破壊し、または汚し、いろんなことを人間はやっております。自然と共存しなければ人間はまっとうには生きていかれない。自然保護ということが環境問題の一環としてクローズアップされていますけれども、私たちはこういうことを、学ばなければならないと思います。なお日本教文社の発行です。

3　「個性」の問題をめぐって

ところで、これもラジオの放送で仕入れた耳学問の一例で恐縮です。自由・個性のむやみな強調の風潮について、ある女性評論家が指摘しています。自由とか個性、これは、昭和五十二年の学習指導要領から特に強調されだしました。自由はもう大分前、戦後民主主義とともに始まりました。教育においても、「個性」というのは最近十数年のキーワードとなっています。しかし、教育じゃなくて社会の方が先に獲得したのです。企業・産業が個性ある人材をまず求めた。そうしないとこれからの生産活動はうまくいかないという判断からです。それに応じて学校も今度は個性というものを大事にしだした。教育はやっぱり後から追いかけていきます。残念ながら大体そうです。最初から、個性と言ってもらいたいものです。いや、わかってはいるわけですが、実際はそうはいかないというジレンマが教育にあります。社会の中の教育である以上、どうしてもジレンマから抜け出せません。

この個性という言葉が出た時に、社会学者で立教大総長もなさった浜田陽太郎さんが、テレビでこんなことを言っておられました。五十二年のことですからもう二十年以上前のことです。新教育課程のキーワード、個性なんていうのはもともと教育のイロハですと。私は聞いていて膝を打ちました。教育のことがよくわかっている人はあそこで個性などの言葉が出てきても全然びっくりしなかったようです。

個性とか自由とかをあまり主張・強調するあまりに、場合によったら、とんでもないことになったようです。いまの幼稚園から始まって小学校・中学校と段々子どもが成長する過程、まずは幼稚園ですね。一番大事なのは幼稚園だと、最近、中教審・教育課程審議会などでも言っております。小学校からじゃもう遅すぎる、幼児教育からもっと考え直さなきゃいけないだろうと。そうすると家庭教育と幼稚園・保育園の教育はほぼ同じレベルのものですから、両方共通の問題になります。そこでもう個性は始まっているから、幼稚園から個性を大事にしなければならない。小学校だけじゃない。事実、幼稚園教育要領でも、すでに個性を大事にとうたっています。

しかし、一方、はき違えちゃいけないことがあるように思います。考えてみると、子どもに本当の個性なんてあるのでしょうか。これはひとつの疑問です。きつい言い方かもしれないけれども、個性とは、そんな生易しいものでしょうか。努力をし苦労をし経験を経て、個性らしいものは初めてジワジワと出てくるものなんです。そういう個性がほんものの個性のはずです。それは、およそ二十歳を過ぎてから出てくるものなんです。だから、成人なんです。もっと言えば、三十歳、四十歳になって

初めて出てくるものなんです。ひとつの文化を生み出すようなレベルの能力を持って、初めて個性は出てくるというべきです。何もよく知らない、何も十分にはできない幼児に、個性ということはまずないのです。その子らしさはもちろんあります。その子らしさを個性ということもあります。それはそれとして否定するつもりはありませんけれども、本当の意味での個性などというのは、そう簡単に出るものではないということも我々は知っておく必要がある。だから、いろいろの躾から始めて、知識・技能が、学習や訓練を通して身についていく。いろいろなことを勉強して、幅広くものの考え方を勉強し、そのなかから個性というものは段々つくり出されてくるものだと思います。最初からそんなに確かなものじゃない。どうも個性とか自由とかの言葉が最初からひとり歩きする傾向があるようです。また、わがまま勝手・自己中心の人間がどんどんふえてきて、ルールもマナーも無視する、または知らないということがいっぱい出てきてしまっている、という教育論議もあります。マナーやルールを、私も随分気にする方で、若い人たち、大学生などもそうですけれども、ルール、マナーをわきまえない人を私はいちばん嫌います。そういう学生には、私は誰彼となく無遠慮に注意してきたものです。

人間社会において何が大事か。たとえば法律というものがあげられます。法は必ずしもパターン化していないけれども、人間の理性とか善意とかいうものによって、自然に生まれてくる。法を一言で言いかえれば、秩序です。宇宙・社会の秩序です。それの回復は、そう簡単なことではないが、そう難しいことでもない。当たり前の生活をしていればできることなんです。けれども、そういうところがおかしくなっているのではないかという見解にしばしば接します。私も体験しておりまして、これはかなり深刻な問題じゃないかと思っております。

4　教育への視点の変換

先程も触れましたけれども、ＨＯＷからＷＨＡＴ、その切替え・転換点にいま教育があるのではないかということです。知識・技能重視から内容価値、私から言えば特に倫理道徳的な価値ですけれども、そういったものに教育内容を切り換えていく必要があるのではないかと思います。教育の内容というのは不思議なものですね。一般的に教育界で考えられている教育内容というのは知識・言語ですね。そう思いませんか。どうやらそういうようにみんな考えていると私は受けとめています。学習指導要領でいえば第一の「内容」です。表現・理解がその中に入っております。言語事項も入っております。これが内容だと一般に考えられている。指導要領でも内容と言っておりますから大方の先生方も知識・技能・能力が国語科の内容だと考えて

いるふしがあるんですね。ところが、内容というのはそれだけでなく、知識・技能・能力を生み出していくようなもので、それは知識・技能・能力に含まれているものなんですね。その内実的な価値です。

特に、国語科はそうだと思います。数学なんかにもあるんじゃないかと思います。理科・社会その他にもあるはずです。音楽なんかもそうでしょう。ただ歌えばいいわけじゃないでしょう。歌詞・歌の心を大事にするでしょう。だから鑑賞という領域がありますね。美術もそうです。絵や音楽を鑑賞するという力は、美的な価値、芸術的な価値を受けとめる力ですね。それは音譜だけでは表せないものですね。音譜の中に込められている、曲とかメロディーの中に込められている価値ですね。そういったものを同時に受けとめていくことが、芸術教育、音楽とか美術とかの教育の中に含まれていることは間違いありません。

国語は、言葉の力を高めていく、もちろんそれも大事ですけれども、同時に、どういう場面でどのように言葉を使うのかという、言葉の持つ中身、つまりお互いの言語生活を高め、深め、広げていく機能そのものの開発ですね。文学教材その他の言葉は、当然中身を持っております。一方の説明文教材というのは、人間が共同生活を営んでいく上で大事な物事、考え方、人間の社会で何が重要か、どういう点が問題か、そういうことの道理がわかるような教材を指すんですね。社会事象や自然現象を記録したもの、解説したものなどいっぱいあります。一時期公害問題を取り上げた教材が出まわりましたね。そういったもので社会の在り方を批判的に受けとめていくようにしました。これは著しい例です。そのように、説明文教材は、大なり小なり、人間が人間らしく生きていくためには社会的に何が必要かを直接的または間接的に子どもたちにわからせるような教材であるべきです。それが大体これまで行われてきているわけですが、そういうポイントに目をそそがなければなりません。

くり返しますが、文学はただ言葉だけの問題ではありません。文学教材は　価値の問題を含んでおります。意志、認識、社会観、世界観、人生観、こういったものを含んでいます。これを価値といいますと、価値の問題を抜きにして、文学教材は語れないと思います。西尾実、時枝誠記両先生が、昭和三十年以後、言語と文学について何度も歴史に残る論争をしました。あのなかで、時枝誠記先生は言語学者ですから、言語を形態的に捉え、そのなかでの機能ということをおっしゃっていました。あくまで言語学者の教育論でしょうね、客観的です。ところが西尾実先生は、文学というのは、価値をもっていて、レベルの高いものなのだとおっしゃっています。単なる言語ではなくて、一定の価値を持つレベルの高いものが文学なのだと言っています。つまり意味や価値を教えていくのが文学の役割なのだと言っている。時枝先生は意味とか価値とかいうものは、すべての言語

に普遍的なものであって、特に取り立てることはないと、客観的、並列的にみている。その違いです。文学は価値を教えるところがあり、そこを大事にするというのが西尾実先生の論ですね。いま、私どもは教育において、いかに生きるべきか、その価値を子どもたちに教えていかなければならない。人間にとって何が大事か、健全な社会を創造していくために、子どもに善さ、美しさ、正しさ、つまり真善美というものを教えていかなければならない。何がほんもので、何がにせものかを教える必要がある。人間というものにはさまざまあって、それぞれ喜びと同時に悩みや不安を抱えている。その悩みや喜びはどういうものなのかを考えていく。そして、なぜ悩み、喜びをもつのかというと、やっぱりまず人間は価値を求めるからということになりますね。私ども教師は、いままでの経験をふまえて、新しい時代を作り出していくために、もう一度、人間がノーマルに人間らしく生きていくためには何が大事なのかを考え直していかなければならない。そして、教育の内容を確かめていく必要がある、作り出していく必要があると思いますね。

5　実践研究の伝統に学ぶ

最終項目として、長野県の教育について若干述べておきたいと思います。長野県の教育、信州教育というのは、明治、大正、昭和にかけて、特に大正、昭和にかけて内外多くの人々に知られてきました。「あの信州教育ですか」と。しかし、最近はどうでしょうか。むしろ、たとえば富山県あたりが教育のメッカになってきていますね。長野県も富山県に教わりに出かける。そこで、かつての信州教育らしさとはいったい何だったのか。これをいくつかの事例で示してみましょう。これらは大方他の都道府県にないもので、しかもそれが現在の教育にとって大事なものだと私は判断し、強調したいからです。

まず、大正六年から始まってもう百年近く経っているのが、総合学習です。これは全人教育をめざして行われてきたものです。いま、総合的学習が平成十四年あたりから行われようとしていますが、一世紀も前から長野県では実質的に行われていたわけです。信州大学附属長野小学校で大正六年に研究学級として淀川茂重を中心にスタートし、延々と今日に受け継がれている。それが今回生活科と合体した。新しくできる総合的学習ともおそらくさらに合体していくだろうと思います。あの附属小学校で進めてきた雄大で本格的な教育、これはやっぱり長野県の特徴のひとつといえるでしょう。他府県でも、たとえば千葉、奈良、東京あたりで、何箇所かそれらしいものは行われてきました。しかし、長野附属小学校の総合学習はちょっと桁が違う。つまり、小学校低学年から六年生まで一貫して、上になればなるほど充実するような方式をとっている。千葉、奈良、東京あ

たりでは低学年だけだったようです。まさに生活科レベルのものなんですね。小学校全体を通して充実させ、発展させるというのはまさしく本格的でしょう。これが本当の教育なんですね。なお、淀川茂重の人と業績については、たしか『信濃教育』の昭和六十三年十月号に、私の編集で特集として出ていますので、ご参照いただければと思います。

次に、これはみなさんどなたもその存在についてはご存じの雑誌『信濃教育』です。ここに一冊持ってきてみましたが、こういう雑誌です。平成十一年二月号がそろそろ出るころですが、そうすると一三四七号をかぞえます。明治十九年創刊です。こんな雑誌が他にあるでしょうか。有名な総合誌『中央公論』、あれは日本でいちばん古い雑誌と言われております。以前私が調べたところでは、『中央公論』の方が巻号数はちょっと多い。しかし、それは臨時増刊号が時々入ってきているためです。期間が長くて休みがなく、月刊誌として出し続けている雑誌は、出版年鑑によれば、『信濃教育』が随一です。いちばん古い。他に『山林』と『水産』、これは実業誌ですね。山林学会および水産学会から出ているものです。その二つは『信濃教育』とほぼ同じくらいの伝統を誇っています。しかし、その両誌にはかなりの休刊があるのです。休みがなくて長続き、つまり長寿日本一の雑誌は『信濃教育』であるということは確かなのです。こういう雑誌を一単位の教育会で息ながく刊行しているという例はおよそほかにはない。これは地方教育会の一機関誌です。内容も学術的また実践的に充実した教育専門誌です。この機関誌は創刊以来今日まで百二十年近くにわたって長野県（県外にもかなりの読者がある）のほぼ全員の教師に読まれ続け、教育の実践・創造の大きな拠り所のひとつになってきたことには、大きな意義を認めざるを得ません。

三番目には、教科書の編集です。一地方の教育団体にすぎない信濃教育会が教科書を編集、発行している。これも出色の事象です。国語、理科、生活科、この三教科の教科書を自分たちの力で編集し、検定を通って使用した、また使用しているという県はほかにはありません。教育をまっとうに考えた証拠です。自分で教材を作り出すところまでいくんです。与えられた既成の教材で授業するというのは、便宜的にそうなりますけれども、本当は教師各自が子どもたちに必要なものを判断し、作り出していかなければならないという理にかなったことをやっているわけです。国語は西尾実先生の監修で、ユニークなものを作り、昭和三十年ごろから二十年間近く、県内の学校では百パーセント、県外でも若干採択使用された。現在は理科と生活科の教科書が継続しております。いちばん早くできたのは国語ですが、他のものよりも早く終わりました。もう一度ということはちょっと難しいと思います。

四番目は、文学作品研究会ですね。国語は文学作品だけじゃ

なくて、大まかに言うと説明文と文学作品があるわけですが、その文学作品の研究をするのです。そういう研究会があるのを、長野県以外には、私は知りません。注意して、広く知っている人に聞いてみますけれども、ほかにはないだろうということです。どうやら、教育研究会、特に指導に関わる研究会などはいっぱいありますが、指導に直接関わらない前の段階、基礎的な段階としての文学作品研究会、文学を作品論として、客観的に研究する、そういった研究会は現場にはないのではないかと思われます。県規模の組織である長野県国語教育学会の研究事業の一環としてずっと継続実行しているという点、ひとつの長野県の特徴です。これは大事なことなのです。ただし、こういったことについては両面から考えればいいのではないか。つまり、学習者研究とそれに直接連結する指導研究がある。そのことと合わせて、社会・文化に視点をあてた文学研究および言語研究を充実させる。この後者が実は、学び手の人間形成にとっては原点的なものだという考え方です。

そのほかにもうひとつ五番目として、哲学・思想研究会というものがあげられます。長野県ではたくさんの研究会が行われています。大きなもので言えば、まず長野哲学会があります。これはかなり古いもので、数十年は続いているようです。それから上伊那郡の伊那哲学研究会、これもたいそう古いもので、大正時代に始まったもののようです。それからもうひとつ私が直接関係している長野市の正法眼蔵研究会というのがあります。創設は昭和五十六年四月ですから、十九年目を迎えました。毎月一回、それに夏の合宿ですが、そこでは、仏典をテキストとして勉強し、教育の支えにしようとしております。日常的に直接は役に立ちそうもないこと、しかし、大きく背景とか基盤とかというところで役立つだろうということの研究をあえてしている。これも長野県のひとつの特徴といえると思います。そういったことは、これから二十一世紀に向かって必ず必要になってくるはずです。おそらく、教師にも時間的余裕が与えられて、勉強を幅広くする、そういうことを行政側も求めてくるのではないかと思うし、求めてきてもらいたいものだと思います。目先の指導だけに追われてあまりこりかたまってしまうと、教育が矮小化してしまいます。そういったことと関連する長野県の特徴、教育の一番底を流れている部分を取り上げて、そこに信州教育の流れはわずかかもしれないがまだ息づいている、こういうことを申しあげたかったのです。

実践的には、要するに、使い方の分からないような能力ではなくて、何のために使う能力なのか、またどう使うのかという視点を自覚させるような教育をこそ求めたい。子どもたちに「力、力」「学力、学力」と言わないで、もっと人生的価値を、こういうことを知りたい、こういうふうなことを大事にしたいというところを子どもたちに直接示していく。または、触れさ

せていくということを重点的に進めてもらいたい。そういう趣旨を生かすための根拠・背景の一端を取り上げてみたつもりです。

おわりに

最後に、「理想は高く、生活は質素に」というワーズワースの言葉を引用して終わりにします。近代は理想を失った、理想を軽視した、理想を無視した、そういう時代でした。人間としての誇り高い理想、これを取り戻さなければならないと思います。そして、「生活は質素に」、これは私の好きな言葉のひとつですが、生活が質素になれば、相対的に理想は高くなるでしょう。戦後の日本は貧困のどん底にありましたから、かえって、みんな理想を持っていたのです。いまは物が豊かになったから理想などいらなくなってしまった。夢、理想というものがどこかに消えてしまった。だから、あえて生活を質素にするということも大事なのです。そうすると、自然に逆作用としての理想というものが芽生えてくる。そうじゃないかと私は思っています。外面の虚飾ではなくて、内面の充実のために、人類の多くの文化遺産、これは実にたくさんあるわけですね。身近にあるわけです。そういったものに学んで、明日のビジョンを築いていこうという基本姿勢に立つことが教育にとって大切ではないかと思います。まずは私ども教師がそういう概念抽出をはかっていく、そのために、まじめな文化遺産に積極的に触れていくことが必要ではないか。いまの世の中にはびこっている情報にはあまりにも虚飾的なものが多すぎます。偏った、うそのものがいっぱいあります。そういうものがあるのは一応しかたないとしても、ちゃんとけじめだけはつけて見ていかないといけないと思います。

以上、まじめ人間くさい、窮屈で面白くもおかしくもない内容に終始しまして、みなさんさぞ退屈なさったかと思いますけれども、私にとってはあっという間の楽しい一時間半でした。県内各地をはじめ遠く兵庫、三重、東京、岐阜などからも、寒い中を大勢お集まりのうえ、ご静聴いただいて、まことにありがとうございました。感謝しながら私の話を終わらせていただきます。

［追記］

平成十一年二月十三日にホテル信濃路で行った講話を、後日、学会誌登載のためにビデオから起こす仕事をしてくださったのは、信州大学教育学部の大学院生諸君です。聞き取りにくい録音からの原稿起こしには、さぞ難渋されたことと思う。研究で多忙の中、あえて労を惜しまれなかった院生諸君に心から感謝します。

（やました　ひろし　元信州大学教育学部教授）